

エイズ犯罪 血友病患者 の 悲劇

櫻井よしこ

エイズ犯罪 血友病患者 の 悲劇

櫻井よしこ

中央公論社

櫻井よしこ

1945年ベトナム・ハノイ生れ。ハワイ州立大学歴史学部卒業。『クリスチアン・サイエンス・モニター』紙東京支局員などを経て、現在NTVニュース・キャスター。1993年度日本女性放送者懇談会賞（SJ賞）受賞。著書に『ちょっと問題 東京国際報道』『政治は誰のものか』『櫻井よしこが取材する』等がある。

エイズ犯罪 血友病患者の悲劇

初版印刷 一九九四年 七月二五日
初版発行 一九九四年 八月七日

著者 櫻井よしこ

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二八・七
振替 〇〇一二〇四三四

©一九九四年 検印廃止

印刷 三見印刷
製本 小泉製本

ISBN4-12-002345-1
Printed in Japan

エイズ犯罪 血友病患者の悲劇

目次

序章	東京HIV訴訟の五年間	7
第一章	「私たち医者が愚かであった」	26
第二章	輸入濃縮製剤はなぜ使用されたか	50
第三章	若き患者の無念と迷走する風間証言	79
第四章	対立するアメリカ人証言	106
第五章	厚生省の立場と郡司証言	134

第六章	露呈された厚生省の内部矛盾……………	163
-----	--------------------	-----

第七章	「私と一緒にエイズで死んでください」……………	190
-----	-------------------------	-----

第八章	最高権威・安部英氏の重い責任……………	216
-----	---------------------	-----

終章	「医師の良心に答めることはない」のか……………	245
----	-------------------------	-----

裝
幀
納
富
進

エイズ犯罪 血友病患者の悲劇

序章 東京HIV訴訟の五年間

一九九二年十二月、少年は死んだ。

悪性リンパ腫が脳、肺、肝臓、脾臓、腎臓に転移して広がり、大量の喀血と下血を繰り返しながら、彼は一二年の短すぎる命を終えた。まだ元気だった頃の、丸い大きな目、クリクリ坊主の頭、一休さんのようなふっくらとした頬も、今はすでに記憶の中だけのものとなってしまった。

血友病を患っていたこの少年、山田太郎君（仮名）は、その治療のために用いられた輸入濃縮血液製剤によってHIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染させられたエイズ患者だった。日本の血友病患者は現在（一九九四年七月）およそ四二〇〇人、その四割を超す一八〇〇人が一九八五～六年頃までにHIVに感染したものと推測されている。

一方、厚生省の統計によると、血友病治療以外の理由でエイズに罹った感染者および患者は一九八五年以降徐々に増加し、一九九四年四月末日現在で一五四六人である。数の上からみても、そして後に詳述するが、日本におけるエイズ発生の経緯からみても、日本のエイズ問題は血友病患者の蒙った悲劇を抜きにしては語り得ない。

エイズウイルスに感染した一八〇〇人の血友病患者のうち、九四年七月現在すでに二二五人が死亡している。亡くなった太郎君は、そのなかでも最も若いほうの犠牲者だった。

彼の一二年の生涯を振り返ってみると、厚生省や製薬メーカーの犯罪的ともいえる怠慢から引き起こされたHIVウイルスへの感染も、エイズに対する社会の非情な偏見も、罪のない子供が耐えるにはあまりにも理不尽な重荷だった。

その重荷に耐えきれずに逝った少年の両親は、一人っ子をなくした今も、子供の真の病名を口にするのを憚り、世間の偏見を恐れながらひっそりと生きている。だが、彼らに納得できないのは、自分たちの最愛の子供がなぜ、あのように過酷な運命に遭遇しなければならなかったのかという点である。結果は事実として受け入れざるを得なくとも、せめてその理由を知りたい、そして納得したいと、彼らは言う。

そしてこの両親は、はじめて、重い口を開き、太郎君の一二年間と、彼の病をめぐる医療について語ってくれた。

太郎君は人口およそ一二万人の地方の町で生まれた。生後三ヵ月すぎに腹部の異常な腫れのため診察を受けると、血友病と診断された。血友病とは周知のとおり、血液を固まらせる特定の凝

固因子が血漿中に先天的に欠乏しているため、わずかな傷からも出血し、なかなか止まらない血液凝固障害のことである。関節内出血を繰り返すことが多いのがこの病気の特徴である。伴性遺伝であるため、男性に症状があらわれる。

太郎君は、治療薬として濃縮血液製剤をうってもらった。はじめは一ヵ月に一回ほどでよかったが、そのうち出血が続くようになってからは、三日に一度までふえていった。

「小さな子供が痛がって泣くのは見ていられません。それで先生にも言われて、出血しないように予防の意味で血液製剤をうち、それで回数がふえていったのです」と、父親の正さん（仮名）は説明した。

血友病の関節内の出血の痛さは凄まじいと患者は言う。痛さに泣いて、泣き疲れて眠るが、しばらくすると痛くて目がさめてまた泣くのだそうだ。この連続で食事を摂る気力も失せるがなんとこのような症状が完治するには二〇日からひと月もかかるという。

さらにひどいときには、痛み止めをうってもきかず、最後はモルヒネで麻痺させるしかない。特に膝の痛むときは横になれないために、縁側などにすわり足を下にたらししておく。何日か我慢すれば痛みがひくことは経験から分かるので、ひたすら我慢し続けるというのだ。

「しかし、今考えれば、いくら痛いからといって輸入濃縮製剤を予防になど、使わなければよかったんです。せめて、痛くなつてから、出血があったときだけ、使えばよかったんです。子供のために良かれと思ってした注射で、子供の命が脅かされるなんて、親の気持ちとすれば、胸を掻きむしられる思いですよ」

正さんは溜めた息を吐くように語るが、責められるべきは正さんではない。

太郎君に投与されたのはミドリ十字のクリスマシンという輸入濃縮製剤であり、八一年一月より八六年五月まで、前述のように三日に一度という高い頻度で続けられた。

「輸入濃縮製剤の危険な実態も知らずに、太郎は三日に一度、それをうっていたんですね……。親としては、この手で注射をうった——なんともいえない気持ちです。」

太郎はそのうち保育園に通うようになりましたが、鼻血を出したり、関節が痛いと言ったりで、よく休んでいました」と正さんは、ポツリポツリと語る。

ちょうどこの頃、正さん夫婦は新しい命を授かった。だが、太郎君に伝わった血友病は次の子供にも伝わるに違いない。伴性遺伝であるから生まれてくる子が女の子ならば直接その子に伝わることはない。しかし、その子が将来成長して男の子を産めば、今度はその子が血友病の遺伝子に苦しむことになる——そう考えて、正さん夫婦はこの子供を産むのを諦めた。医者のお勧めも大きな決め手になったそうだ。

こうして太郎君を大事に育てていこうとしていた矢先、彼ら夫婦は青天の霹靂へきれきに見舞われたのだ。太郎君が、よりによってエイズウイルスに感染していることを告げられたのである。しかも、その情報は、なぜか保育園の関係者の耳にも達してしまった。卒園までわずか三ヵ月という時期になって、太郎君は保育園に來ないでほしいと言ひ渡されたのだ。

「私もお母さん（妻）も、太郎の出血がひどいときは、とるものもとあえず看病します。ひと晩でチリ紙が一〇箱くらいなくなるほど出血するんです。救急車は来るわ、ご近所は大騒ぎする

わ、私たちは手にも顔にも衣服にも、太郎の血がつくんです。でも、長年子供と一緒にいても私たち夫婦はウィルスに感染していません。そのことを分かってほしい。そう簡単にうつるものではないことを」

正さんは市当局に足を運び、保育園にも頼んでみた。だが結局ダメだった。

「そのときの気持ちは、もう、表現できないねえ」と正さんは繰り返す。

エイズは、家庭で一緒に暮らしていてもうつらない。まして学校や保育園ではうつらない。職場でもうつらない。そのことを正さんは言い続けた。

太郎君は小学校に入学したが、通ったのは最初の三年間だけである。しかもその間は、痛みなどで休むことのほうが多かった。そしてついに、恐れていたエイズ発症を宣告される。八九年のことだ。エイズウィルスに感染していたためか、太郎君は小学校に上がっても発育がはかばかしくなかった。体の成長はほぼ止まったようにみえる。その結果、小学校の高学年になっても、一年生の子供の頃の姿だった。小さな手に小さな足、体全体の幼さの中で、クルッとした丸い目がありわけいじらしく可愛くみえた。また病院への入院の繰り返しの中では、勉強のほうも進まなかった。平仮名がやっという状況だったが、気分よい日は好きな縫いぐるみなどで無邪気に遊んでいた。

「エイズ発症、つまり免疫機能が低下するということは、それはもう恐ろしいものです。抵抗力のなくなった肉体を、ありとあらゆる病原菌がワッと襲うのが目に見えるような気さえます。太郎の場合は、次々にガンが発生してきました。脳に腫瘍ができてその影響で左手がまったく利

かなくなりました。曲がったまま、全然動きません。右手にも足にも麻痺がきました。両目はサイトメガロウィルスに感染して危うく失明するところでした」

九一年五月頃より三九度から四〇度をこす高熱が続くようになり下痢症状も続いた。地元の病院では治療しきれずに正さんは「東京ヘモフィリア友の会（東友会）」の助力を得て東京の大病院に太郎君を移した。同時に長年勤めてきた会社も退職した。兄弟にだけは病気についての真実を打ち明け、力になってもらうことにした。

「生活も苦しくなるけど、この子の側にいて、親としてできることは何でもしよう。一日でも長く生きてほしい、と思った」と正さんは言った。

はじめて太郎君に私が会ったのは、東京での入院から一〇ヵ月ほどすぎた九二年五月のことだった。太郎君の体には点滴の管が繋がれ、黄色の液体が規則正しいリズムで体内に送りこまれていた。

「ここに来た当初は食物も少しはうけつけたんですけど、今は点滴だけです。もう何ヵ月も何も食べられないんです」と正さんが説明してくれた。

ずっと寝たきりのせいかな痺の後遺症か、太郎君は足が痛いと言う。ベッドの脇にすわってしばらくさすっていると、彼ははつきりした声で、「もういいです。ありがとうございました」と言った。

「上手にお礼が言えて偉いね」と皆ではめると、彼ははにかむように笑った。

部屋にはクラスメートの寄せ書きと一緒に、マンガの主人公のポスターや縫いぐるみが飾られ

ている。

「この病気は成長も止めてしまいうんでしょうか。太郎の趣味は子供っぽいんですよ」と正さんは少し心配そうに言った。

私たちの帰りぎわ、今度来るときのお土産はなにがいいかとときくと太郎君はちょっと考えて「西瓜とおもちゃ」と答えた。食物は摂れなくなっても、喉ごしのよい西瓜を欲しがった太郎君に、私は救われる思いがした。

だが、それから間もなく、彼は大きな危機に見舞われる。

「六月の十三日から三日間、すごい咯血と下血がぶっ通しで続きました。もう駄目かと思いました。この出血はあの病気特有のもので、先生も、駄目かもしれないと言っていました」——正さんはどんなときにも、決して「エイズ」という言葉を使わない。「あの病気」「あのウイルス」という言い方をする。よほど窮した場合には、「エイ・アイ・ディー・エス」と言うが、まるで病気の呪い、社会の偏見の呪いを忌み嫌うように、「エイズ」という表現を避ける。その徹底ぶりに、病気や偏見に対する正さんの抵抗の決意をみる思いだ。

「太郎の咯血をおさえるのに、ビニールの手袋をするヒマもなくて、口にあてた私たちの手が真っ赤になるんです。子供のほうは苦しくて口もきけない。下からも大量に出血する。太郎を助ける私たちも動転して、あの凄まじさの中では、恐ろしいだけで何も考えられませんでした。

太郎の意識はなくなり、ずっと昏睡が続きました。意識が戻ったのは一〇日余りも後の六月末でした。『なんとか命が繋がった』——私は日記にそう書くのがやっとでした」

主治医は、この頃、太郎君にもう一度自分の家を見せてやるとしたら早いほうがよいと言った。正さん夫婦は点滴のチューブのつけ方を詳しく教わり、寝たままの太郎君をワゴン車で故郷に連れ帰った。

「戻ったとき、意識ははっきりしてたんですが、八度五分ぐらいの熱が出てきました。それで一週間の予定を二泊できりあげて、急いで病院に戻ってきました。

そしたらその夜です。すごい痙攣^{けいれん}と発作がおきて、目はひっくり返る、口は曲がる。医者が五人も六人も来て注射したり手当したりしてようやくおさまりました。けれど、一時間もするとまた同じように痙攣と発作の繰り返しです。

この頃は、太郎はいわゆる末期だったんですね。悪性のリンパ腫が抵抗力のなくなった太郎の体でわがもの顔に暴れていたんです。悪性リンパ腫は脳にも、肝臓にも脾臓にも腎臓にもあきれるほど広がり、それに対して、抗ガン剤はあっても太郎の体に戦う力はなかったんです。この抗ガン剤で肺だけはなんとか大丈夫だったんですが」

お父さんの正さんはもう話すのも疲れるというふうに口ごもった。沈黙が続いてまたポツリと話す。

「九月頃小康状態になりました。私のことを父親だと分かっていたし、写真を撮るとき、手をあげて、といえば、手をあげてくれました。ただ、太郎はもう声を出して喋るということはできませんでした」

「この頃の日記をみると書いてあります。九月四日から十二日にかけて、目薬を少しずつ入れる。